



昭和44年(1969年)

12月号 (No. 294)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文

第二次エベレスト偵察隊の成功……	1
エベレスト通信③……	1
第二回図書即売交換会……	3
山岳図書出品目録……	3
新・爺蘭土維記③……藤島 敏男……	3
中華全国山岳委員会成立……	4
シェラクラブのアウトティング……	6
立山地区のアウトティング……	6
北アルプスに同行して……	7
シェラ・クとの日光懇親山行……	7
キンボール夫妻歓迎会……	7

図書紹介

すこし昔の話……豊田 春満……	8
日本登山史……渡辺 公平……	8

図書便り

新刊図書受入報告……	9
定期刊行物受入報告……	9

会員通信

西表カンピラの滝……	5
梓川だより……	5
広島大帰国あいさつ……	7

会務報告

11月理事評議員会……	9
第255回小集会報告……	9
関西支部小集会報告……	9

その他

パキスタンにおける登山許可……	10
解禁後ネ王国からの登山許可隊……	10
雑学教室……	11
あとがき……	11

第二次エベレスト偵察隊
偵察成功と
本隊の準備状況

登山隊本部

第二次偵察隊からの連絡によれば、

同隊は、第四キャンプを七、〇〇〇mの軍艦岩の基部にもうけた後、南壁の中央ルンゼにルートをとって、十月二十七日、五〇〇mの地点に第五キャンプを建設、翌三十日、小西、植村両隊員により、V字状氷壁の基部から右手の雪の斜面を登り、七、七〇〇mまで到達、三十一日は酸素補給器を用いて前日の到達点から三〇〇m登って上部岩壁の基部に達した。

翌十一月一日、メンバーチェンジした中島、佐藤(之)両隊員は、前日の到達点から右の岩場へとりつき、夕刻八、〇〇〇mに到達した。この高度は第二次偵察隊の予定高度であり、偵察隊はこれから上部のルートについても検討し、来春の本隊の登頂に充分な資料を集めて十二日カトマンズへ帰着、偵察の任務を終了した。偵察隊の報告によれば八、〇〇〇m、八、四〇〇mにある垂直に近い岩壁の突破が登頂のキーポイントであるとのことである。

偵察隊はベリジェで越冬観測に従事する、植村、井上両隊員をのこし、宮下隊長以下一〇名で十一月二十五日羽田着帰国の予定である。

一方本隊の準備の方も着々進捗しており、既に大部分の装備・食糧等は発注を終り集荷を待つ状況にある。装備についても各種の新兵器が開発されているが、この中でも特に南壁用に考案されたヘルメット型エノマイザーは、八、〇〇〇mの岩壁でハーケンを連打する様な時には俥力を発揮するものと期待されている。この場合にはダブルロープ式に一本はゴム・ホースで連絡し、トップは空身で登り、セカンドからこのホースによって酸素の補給を受けることが可能となる。その他南壁用特殊テント、高所靴等すぐれた装備が開発されつつある。

登山隊員の決定は、第二次偵察隊の帰国するまで決定が保留されたが、近

日中に決定の予定である。

エベレストの準備は上記の通り、すべてが順調に進んでいるが、目下の最大の問題は資金の調達にしまわされている。会員内部からの募金につきましては十月号の会報「山」でお願いしましたように、目下募金中であり十一月十七日現在二九名、四三〇、七〇〇円の募金を戴いておりありますが、会員からの募金目標額三〇〇万円の二三・五%を達成したに過ぎません。今後共何卒宜しくご協力の程お願い申し上げます。

☆エベレスト・カレンダー
と記念絵葉書の発売

この度、本会では、毎日新聞社と共にエベレスト・カレンダーを制作しました。グリーン氷河からのエベレスト、雪煙を上げるエベレストなど、さまざまな姿を豪華なカラー写真におさめたもの(送料込)。ご希望の方には一部五〇〇円(送料込)で頒布致しますので事務局までお申込み下さい。

記念絵はがきは南壁の全容のわかる素晴らしいものです。一枚十円でお頒け致しますが、郵送申込みの場合は十枚以上をお願い致します。(送料本会負担)

◇エベレスト通信③
—第二次偵察隊報告—偵察隊長
宮下 秀樹

〔第八信〕 事故未着。
〔第九信〕 十月十二日
付、B・Cにて
十月三日(晴) 予定通
り、宮下、田辺、佐藤と
ミシマ、ハクバ、バサン
の六名にてC2泊り。中
島以下でこれをサポート
する。10時着。テントの
中はとても暑くていられ
ない。気温1度、テント
の上は30度になっている。
天幕にフライを張るとやはり相当に
しのぎ易い。それでも夜間はマイナス
16度になる。

十月四日(晴) シェルバ15Kg、サ
ブ10KgでC2を六時三十分スタート、
六、五〇〇mの米国、インド隊のA
B着。12時30分。暑さに参る。シェ
ルバはC2に下山。中島以下はC1以
下のルート補強。

十月五日 ウェスタン・クームでは
7時30分頃より日が射し暖かくなる。
しかし9時頃より吹き出した風に地吹
雪で眼があげられない位。殊に南壁は

V字状の西稜よりから轟々たる音と共に粉雪を吹き下ろし、相当な量のようです。南壁の最もロッシュェより六、七〇〇mの地点に登り(殆んどインド隊のC4の位置)、種々とルートを検討し、次の交替メンバーの中島、小西、植村隊の感想と併せて、ルートの決定とABCの地点を決めようと、C3に下山する。その夜は一晚中風が吹きまくる。

十月六日 宮下隊長はBCへ下山し、かわって中島隊がC3へ入る。木村カメランはC3付近まで来て南壁の写真とりに懸命。この日アン・ナムギールは調子悪く、テンジン・ザンビエに交替して、ダワ・テンジンとともに中島隊のサポートを行なう。

十月七日(晴後曇) 大森ドクターはC2に上り、木村カメランと合流する。中島、小西、植村、バーティは、先日到達した六、七〇〇m地点より約七、〇〇〇m地点まで、南壁の試登を行なった。

この日スキー隊が二五〇名のポーターと共に到着し、我々のBCから約五十m離れた場所にBCを建設するも、ダイレクトに入ったため多くの隊員が高山病でまいていった。またアン・一三名も到着し、殆んど大部分の荷物が手許に入る。但し、井上、佐藤、白井、野口は高度順化のため、タンボチエに停泊中とのこと。

十月八日 中島隊はシェルバ全員と共にBCへ下山する。午後四時よりスキー隊の招待で夕食を共にする。久しぶりのビールとご馳走に、我々の隊員は種々と珍芸を披露するが、未だ高度になれないスキー隊は元気がなく気の毒な感じ。

十月九日 スキー隊はドクターと佐伯隊員が付き添って計六名がタンボチエへ下る。昨夜ザンビエが胃穿孔の

症状を呈し、危篤状態に陥る。大森ドクターは徹夜の看病で、大量の抗生物質その他を投与し、葡萄糖の点滴を行なう。この日スキー隊の三浦隊長、安久隊員、シエルバは我々のつけたルートを使用しC2へ登る。ガイドのため我々のシエルバ二名を貸す。

十月十日(小雪後晴、寒し)BCでの休養第二日目。テンジン・ザンビュ一の容態はやや快復するも血便甚だし、一日二〇〇ccの点滴を続ける。一応死地は脱するも今後の遠征には無理と思う。今回の発病の直接原因は飲酒にあったようである。本日シエルバ十二名荷上げのためC2を往復約二二〇kgの荷上げを行なう。夜作戦会議を行ない今後の計画を決定する。要旨次の通り。

① 今秋の南壁は着氷の上に雪がつき一見登り易そうにみえる。雪崩の危険は新雪が降った直後以外は殆んどないと考えられるが、吹き下ろしの地吹雪は相当なものである。その他落石の跡がかなりみられるので注意を要する。

② 今回は天幕及び人数の点からみてC3(ABC)を六、七〇〇m地点に上げざるを得ない。

③ BCへの休養は往復五日を要し、而も可成り長距離であるから、C2(六、一〇〇m)を強化して休養天幕とし、以後はC2泊りとしBCへは下りない。

④ ルートはABCより一旦南壁の基部へ下り、大きなベルグシユルンドを越して軍艦岩まで直登(シユルンドより高度差約三〇〇m)岩の左或いは右より乗り越えて、ルンゼの右側リッジの基部目掛けて左斜め上へ登る。この間距離約四〇〇m、途中二ヶ所の雪崩路があり、而もすべて蒼水と思われ、遮蔽物が無いが止むを得ない。キャ

ンブサイトは右岩稜の取付(約七、五〇〇m)までは軍艦岩の上及び下以外はなさそう。後は右岩稜の基部沿いにV字まで氷雪面を直登する予定。

⑤ BCの出発は十二日とし、以後三週間の予定で南壁の偵察に向う。尚南壁偵察隊の六名以外は、毎日の佐藤氏はBC、井上はBCまたはC2、NHKの二名はC2木村カメラン、大森ドクターはC2またはC3と持分をきめる予定。

十月十一日 午後三時頃待望の後発隊、毎日佐藤氏とNHK二名がBC入り、井上も十二日にロブジェよりBC入りする予定。

【第十信】 十月二十一日付BCにてこの一週間は種々なことがありました。遠征とはかくなるものかと考えさせられました。

十月十二日 午後二時井上隊員BCに到着。この日は予定通り中島ら三名シエルバと共にC2へ登る。

この日ナムチエのインスベクターからリエゾンのラナ宛に「プライテンバツハの遺体引取りに米国外使館から許可の申請があり、インド放送によるとビショッパが、ディレンファースがくるかも知れない」との手紙がとどく。

十月十三日 井上はじめNHK、毎日側と今後の打合せを行なう。午後ネ政府とナムチエのインスベクターより、両方ともネバール語の公文書でプライテンバツハの遺体引渡しを求めてくる。その通訳の際、ネ政府はビショッパに引取りの全権を委任して、タンボチエヘリでとび、タンボチエで待っている由。この連絡にきたボーターに遺体を持つて下ろしてくれといっているという。

十月十四日 C3の田辺、小西(十

三日登った、C2の中島以下3名の調子も余りよくなく、天候もガス、強風、小雪と可成り悪いので、上の連中を休養にして、宮下、木村の二名がC2へ登る。氷河の動きの激しいのに驚く。

十月十五日 宮下以下、C3へ向けて出発の直前、七時の交信で、BCの大森ドクターより長々の交信。即ち、

「昨十四日夜八時すぎビショッパより手紙が届き、明十五日朝九時までにタンボチエまで遺体を下ろすようにとの命令口調の手紙。十三日にボーターに遺体を引き渡さなかったことが誤解を生じたいらしい。大森ドクターは止むなく、十五日朝、遺体に遺品とリストをつけて引渡した由。」宮下以下C3に入るも隊員の調子是不調。

十月十六日 C3の朝は寒い。マイナス22〜23度に達し、常時風が吹き相対に厳しい。若手を休養させて田辺と二人で軍艦岩迄登る。先日の試験時と併せて九本、約三二〇mのフィックスが真直ぐに垂れ下がるのであるから壮観である。始めてアイヌ・メスとアイヌ・バイルで四つ違いに登ったが、この高度では快調で、高度約六、九七〇mまで達する。

十月十八日 植村不調のため、五名で狙うがABCより軍艦岩まで三時間を要するのは痛い。止むなく仮りのC4(二人用)を設けることを考える。今日は十二時より三時間で四ピッチ(一六〇m)のトラバースのみに終る。蒼水が露出して相当に悪化してきている。午後一時半頃ABCのテント・サイトで大森のコールがあり、二人で赤旗を打ち振っているの何かあったと直感して、私一人下山する。約四十分で下山して、木村カメランよりスキー隊の隊員のボー・ドルデニがクレバスに落ち死亡したことを知る。スキー隊のC2への連絡がついていない状況なの

で、植村とミンマを直ぐにC2(六、一〇〇m)へ下らせ協力させることにした。

結果は一日遅れたわけだが、前後我々のC2直下のクレバスの動きがはげしく、もう三〜四回も手入れた位だが、翌日大森ドクターのC2入りの際、良くみてもらって、必要とあらば私が下って補強することにしていたが、丁度大森隊がC2の直下で、スキー隊のボー・ドルデニ、アン・リタ、ニマ・テンジンの隊と五〇〇m位に近づき、ボー・ドルデニが、大森隊にコールした直後、従来我々のつけていた丸木橋の横一〇m付近で大音響と共にスノー・ブリッジの崩壊があり、アンザイレにしてその上にいた、ボー・ドルデニとアン・リタはクレバス中に転落、アンザイレにいないニマ・テンジンが慌ててロープをつかんだが火傷をして離れ(すぐ傍らに我々のフィックスが張ってあったのだが)、二名が転落、先のボー・ドルデニが即死、アン・リタも重傷をおった。時に十一時四十分。直ちに居合せた大森、野口、井上隊員とアン・ナムギャル、アン・ニマ(他のシエルバは皆逃げた)、スキー隊の石黒隊員とアン・リタを引揚げたが、ボー・ドルデニの遺体は頭部が見えているが非常に危険なため一時救出を見合わせる。そうこうしている中に植村の連絡をうけて、三浦隊長、加藤、安久隊員らスキー隊が到着した

が、ボー・ドルデニの落ちた場所の確認も行わずに下山してしまっただけ。結局、大森ドクターがシエルバを叱りつけたが、アン・リタをBCへ下ろしたが、この作業にはスキー隊の加藤隊員が付添っただけだった。

十月十九日 宮下、木村でC2に下り、新しいルートの開拓にあたり、植村、ミンマ、バサン・ノルブと一日中捜したが、遂に新ルートは見つから

なかった。スキー隊は休養した。

十月二十日 ルート開拓に最後の手段として三十mのロープ・ラダーを掛けてみたが、両側及び下部アイヌ・フオール崩壊がはげしく断念。午後になって、やっと何とか通れるルートをスプツェ側に大廻りにならなければならないけれど、見付けはつくとする。スキー隊は遺体の引揚げは見切りをつけ、全員われわれのつけたルートからC1へ集結した。十月二十日現在、仮のC4の中島、小西隊員は高度と強風のため余りかはらず、もう一〜二日様子を見て計画の立て直しを計らなければならないかも知れない。C3の田辺、佐藤(之)も余り調子がよいといえず、C2への植村、ミンマは新ルート工作にもう一日を要するため、新戦力として大森、井上の補強を考えている。私もボスト・ランナーを出した後、上へ登ります。

十月二十二日 本日現在七、四五〇mまでフィックスを付けるも、風が強く、可成り手強い様子。十二時にレンファース一行八名がBCへ登ってくる。女性、ブロススキーヤー、ドクターなど各国人からなる八名の集まりで観光旅行の様なものです。ディレンファースは、三浦氏のスキー滑降について六三年のアメリカ隊員の中の二人が、ローツェ・フェリスの基部からアイヌ・フオールの下部まで滑った記録があるといっていました。

彼の七一年の南壁にける意気込みはすばらしく、私とロバートの意見が一致し、六七年にネ政府に正式に申込みをしたのに、といってJACに先を越されたことと残念がっていました。そして日本隊が南壁の正面を登るのなら私は左か右を登りたい。また今秋はV字の右を行くつもりだといったら、それでは左側を行くかといっていました。またプライテンバツハの件もあって深く感謝の意を表していました。

第二回図書即売交換会

図書委員会

第二回図書即売交換会は十月二十五日(土)午後一時から三時まで本会ルームで開かれた。最初三時から五時の予定であったが、箱根の現地小集会和日がかちあったため、時間を繰り上げた。会報に予告を出しただけだったが、大変な人気であった。

今回は小島島水さんの「雲表」「アルビニストの手記」、高野さんの「日本山嶽志」、横さんの「山行」の初版本、田部さんの「日本アルプスと秩父巡礼」のこれも初版本など珍らしいものがずらりと並ぶ参加者の眼を奪った。洋書ではエベレスト隊のハント隊長

新・爺蘭土雜記 ③

藤島敏男

ハミテージからのマウント・クックの仰望は、ツェルマットからのマックの仰望に比べて、劣るどころかむしろ優っているという。ジョン・パスコーの著「未踏のN・Z」の序文に、筆者H・E・L・ポーター(英国人)は、N・Zの山を讀めたあと、かつてマルセル・クルツ(スイス人)と共にハミテージを訪れたとき、愛国者タルツさえも「ツェルマットからのマックホルン」は「敵わぬ」と叫んだと書いている。

山へ入る日の朝はよく晴れて、宿の前庭からマウント・クックの仰望は、着いた日もあくる日も雲につつまれて、望まぬまま晴らしいものだった。をのむような素晴らしいものだった。飛行場からタスマン氷河の源頭まで約二十五マイル、兩岸は岩と氷と万年雪の山々が屏風のように立ちならぶ、

がサウス・コルまでかき上げて読みふけたというボローの「ワイルド・ウエール」などこれも珍品が出て雑誌も北大部報の「二、二、JAC」会報のバックナンバー、山と溪谷、岳人などの古い号のものなどたくさん出品があった。

別項の出品目録をのこらなければ市価よりはるかに安いことが一目瞭然と思うが、午後二時締切りで抽選を行った。あらかじめ各出品書に番号を付しておき、それを係まで申し込んでもらったのだが、和書で一番多数の希望者のあったのは今西錦司「ヒマラヤ

グラン・コリドール」でもいいという中を、三十分足らずで、われわれを運んでくれたセスナ機は、タスマン・サドル近くの雪山に、いとも簡単に着陸して、人と荷物をおろすと、用はすんだとばかり戻っていった。

網を結んで乗越(八〇二フィート)まで登って、氷河をかけた山が掃いてすてほど重なり合うのを眺めてから、その日の泊り、タスマン・サドル・ハット(七八〇〇フィート)へ下った。国際公園管理部所有のこの小屋は、比較的近年の建設らしく新しいもののだ。定員八名、八人分の寝袋、ケロシンの炊事用レンジ、食器一切が備えてあった。寝食の食だけ担いでくれば用は足りるという仕掛、これが本当の小屋だろう。もともと日本では定員八名の山小屋などは、意味をなさない。

山麓の事務所、現在山小屋に何人泊っているか、全く空いているか、一目で分かる掲示板があったし、小屋との間には無線電話がよく通じていたから、定員超過でハチ切れるようなこと

を語る」十九名、深田久弥「ヒマラヤの高峰全五巻」十三名、マライニ「ヒマラヤの真珠」十二名、島水「アルビニストの手記」十二名、横「山行」、大島「山」各十名、また梓版「先鋒者」は表紙の取れた破損本であったが、表紙をつけて作りなおせば、というので、これも十名の希望者が出た。

洋書ではスコットの「ワトキンス」とウィルキンソンの「ランド・オブ・ザ・ロングゲイ」各八名というこれも激戦となり、大にぎわいのうちに抽選が行なわれた。一人でも何冊も当ってニコニコ顔の人、一冊も当たらないと泣きべそをかいている人、当りすぎてもう棄権するという会員まで出るなどまことに楽しい雰囲気集りとなった。雑誌は抽選はせず早いもの勝ちというのではないとおもう。

さて登る山だが、深田君がホッホジテッセル・ドーム(九二五八フィート)はどうかと提案したので、これならば小屋から一番近く、面倒な岩登りもなさそうなので、一も二もなく私は賛成、ガイドもよからうという。若いふたりには少々物足りないかとも思ったが、まあ我慢してもらうことにした。

あくる日(一月三十一日)は底ぬけの快晴、すこしつめた朝風の中で、網をむすびクライムンをつけて、六時半に出発、堅雪にクライムンがよく利いた。クレパスを避け、雪庇をよけ、申訳ばかりのステップも切ったが、頂上まで三時間余の登りで済んだのは、大いに助かった。

名の通り雪の円頂、風もないおだやかな日、私達は腰をおろして、四方にひろがる岩と雪と氷の山波を、飽かず眺めた。山は無数にある。岩尾根や岩壁の一筋縄では登れないようなものもある。これが日本にあつたら、砂糖つくの様に登山者がむらがり、山岳

とししたが、北大の部報やJACの会報、戦前の山と溪谷などはすぐ机から姿を消し、抽選後単行本の残ったものも遅れてかけつけた会員の手におさまり、ほとんど売りさばれた。来年も続けたと考えているので、会員各位で御不用の書物をいまから整理しておいていただきたいと思う。出品された会員各位にあらためて厚く御礼申し上げます。

なお、売り上げ金の五分を図書基金として寄付していただいた。

前日の午後から小屋で泊り合わせ、た、英国人とN・Z人のふたり連れも登ってきたが、となりのマウント・アイルマ(八八九フィート)に登る積りだろう、先きに下っていった。彼等は一時間も頂上に過ごしてから、彼等のあとを追った。アイルマはひどく尖った姿の山だが、裏へ廻りこむルートで、どうということもなく頂上をふんだ。

小屋への下りは、雪が腐って歩きにくい。氷河の照りかえりがあつた。三十年前、アルプスの山を歩いたときも、かえりはいつもグズグズの雪と照りかえりに、ゲンナリしたのを思い出した。帰着十二時半。

タスマン氷河までは、小腹の虫がおさまらないうえ、やさしい山でも二つ頂上に立ち、申分ない展望に恵まれたことで私は満足したのである。

山岳図書出品目録

和書

山の気象と遭難(気象庁)	三百円
富山県の歴史と文化(富山県)	五百円
アルプス縦走(JAC)	五百円
遥かなるヒマラヤ(葉師義美)	七百円
登山全書(松方三郎編)	二百円
日本山岳講座全六巻(白水社)	千二百円
山岳ノート(ハイキング・ペン)	三百円
登山者(四谷電報)	二百円
北アルプス(渡辺公平ら編)	二百円
北アルプス(田部重治ら編)	二百円
かまぼ(三砂秀一)	五十円
山岳講座(白水社)	五十円
登山実用百科(小島六郎ら編)	五百円
登山全書冬山篇(河出書房)	五十円
登山全書夏山篇(河出書房)	五十円
登山全書随想篇・岩と高原	五十円
登山読本(川崎隆章)	二百円
忘れえぬ山一巻(串田孫一編)	二百円
このさき危険(吉沢一郎)	二百円
縦走路(新田次郎)	二百円
アルプス紀行(チンダル)	二百円
登山者(伊藤人著)	五十円
山に憑かれた男(加藤喜一郎)	三百円
登山小史と用具(西岡一雄)	三百円
北八ツ彷徨(山口雅久)	五百円
ヒマラヤの真珠(マライニ)	二百円
カンチめざして(パウアー)	三百円
峠(串田孫一編)	二百円
八カ岳研究上(独標登高会)	千円
(特装本)	
チベット(マライニ)	七百円
はるかなるエベレスト(マリ)	三百円
ドリノ西壁(マニョス)	五百円
ヒマラヤを語る(今西錦司)	二百五十円
山なみはるかに(三田幸夫)	三百円
ヒマラヤニリ日記(石坂二郎)	二百五十円
ヒマラヤニリ(村木潤次郎)	二百五十円

冬山技術セミナー(金坂一郎)	百円	日本山岳全集六卷	五百十円	白きおたやかな峰(北杜夫)	三五〇円	日本アルプスと秩父巡礼(田部重治)	
日本風土記・東北(宝文館)	百円	世界山岳全集六卷(エグラ)	二百円	山菜記(片岡博)	四五〇円	(初版)	
現代紀行文学全集山岳篇上(修道社)	百円	世界山岳全集十三卷(鹿子木信信)	二百円	馬場辰猪(萩原延寿)	三五〇円	雲表(小島島水)	五十円
河口慧海(河口正)	百五十円	ザイルのトップ(ロッシェ)	五十円	評伝松浦武四郎(吉田武三)	二千五百円	日本アルプス縮刷版(小島島水)	千円
原色花木図譜(穂坂八郎)	百五十円	マナスル・少年少女のために(横有恒)	百円	現代登山全集・谷川岳	二百円	山の素描(黒田正夫)	五百円
日本風景論(岩波文庫版初版)	七百元	登山者夏山篇(河出書房)	百円	日光と上越(主婦と生活社)	五十円	アルプスの旅より(チンダ)	二百円
ヒマラヤの高峰全五巻(深田久弥)	千円	登山者の天文学(山本一清)	百円	エーデルワイスシリーズ	各百円	高山植物観察と栽培(石井勇義)	二百円
現代登山全集・槍・穂高	二百円	トルキスタンへの旅(タイクマン)	百円	わが心の山(日本山岳写真集団)	五百円	山岳の驚異(科学画報社)	二百円
現代登山全集・白馬・不帰	二百円	山行歌曲集(早川義郎)	五十円	毒舌旅行(西丸震也)	百円	(雑誌の目録は省略した)	
現代登山全集・北岳・甲斐駒	二百円	阿蘇(北田正三)	百円	いのちの山(古川純一)	五十円	洋書	
現代登山全集・富士・丹沢	二百円	喪の銀鏡(トロワイヤ)	五十円	穂高に死す(安川茂雄)	百円	Holland, The Butterfly Guide	300
現代登山全集・山の危険	二百円	日本山脈縦走(読売新聞社)	百円	若きアルピニストの魂(ロスト)	百円	Ayre, Wild Flowers of Newfourndland	300
現代登山全集・登山の基礎	二百円	ビッケルの思い出(横有恒)	百円	ロシエール氷河(山本健一郎)	五百円	Heinrich, Manual for Ski-Babies	300
ヘイデン中央アジア探検紀行全集・全十一巻	三千円	山登り(JAC篇)	五十円	山の心象(石橋力)	五十円	Richardson, The "Shilling" Ski-Runner	200
西域探検紀行全集・ユーラシア横断記(アトキンソン)	四百円	先鋒者(大島亮吉) 破損本	二百円	山旅と随想(田部重治)	五十円	Hunt, The Ascent of Everest	300
黄河源流からブチ湖へ(ブルジェワルスキー)	四百円	八ヶ岳(小野尚俊)	五十円	破片岩(冠松次郎)	四百円	Scott, Gino Watkins	300
西トルキスタンへの旅(ランスデル)	四百円	リニクサック(早稲田の山)	五十円	山と漂泊(河川徹三)	百円	Lun, Switzerland	500
カラコルムを越えて(ヤングハズバンド)	四百円	高山植物の話(武田久吉)	二百円	垂直の散歩(藤本九三)	百円	Borrow, Wild Wales	500
内陸アジア縦断(ボンヴァロ)	四百円	ネパールの高地で(ハーディ)	百円	山を考へる(本多勝一)	百円	Howard, West African Explorers	300
チベット旅行記(河口慧海)	四百円	登山の基礎(山崎・金坂)	五十円	日本山岳全集六卷(明文堂)	二百円	Swayne, A Concise Glossary	300
中央アジア踏査記(スタイン)	四百円	緑の誘惑(千坂正郎)	五十円	秘境西域八年の潜行(西川一三)	五十円	Geographical Teams	300
シルクロード探検(大谷探検隊)	四百円	登山の基礎(山崎・金坂)	五十円	山岳研究講座Ⅱ(JAC関西支部)	各五十円	Stephen, The Playground of Europe	1000
蒙古と青海(ゴズロフ)	四百円	アルプスの読本(川口邦雄)	五十円	山をめぐる行為と夢想(マイエル)	二百円	Kiannura, Flora of Afghanistan	1000
西域への砂漠の道(ラテモア)	四百円	峠をめぐる山旅(田沢武夫)	五十円	アルピニストの手記(小島島水)	四十円	Nakao, Land and Crops of Nepal	100
中央アジア自動車横断(フエーザル)	四百円	静寂郷を訪ねて(野口冬人)	五十円	(初版)	四十円	Himalaya	100
山ノ(モルゲンタール)	七百元	霧の山(安川茂雄)	五十円	日本山岳志(高頭式)	四百円	Kiannura, Fauna and Flora of Nepal	500
現代紀行文学全集山岳篇上(修道社)	五十円	孤獨なる死(安川茂雄)	五十円	山行(横有恒)(初版)	五百円	Kingdoms, A Plant Hunter in Tibet	5500
南アルプス(百瀬舜太郎ほか)	二百円	地図のない山(安川茂雄)	五十円	山の人生(柳田国男)	三百円	Shipton, Mountains of Taryat	3500
詩集登攀(秋谷豊)	二百円	単独行(加藤文太郎)	五十円	山の憶ひ出上下(木暮理太郎)	六千円	Clark, An Eccentric in the Alps	2000
夏山入門(碓井徳蔵)	五十円	週末ハイキング(中村謙)	五十円	日本アルプス登山と探検(ウエー・岡村訳)	千円	Bailey, No passport to Tibet	1500
エベレスト登頂記(藤本九三)	百円	エーデルワイス(明文堂)	五十円	山・研究と随想(大島亮吉)	三千円		
ゴビよりヒマラヤへ(ヤングハズバンド・朝日新聞社)	二百円	原色日本高山植物図鑑(武田久吉)	千五百円	日本アルプス巻一(小島島水)	二百円		
		原色日本山岳図鑑(吉良哲明)	六五〇円	日本風景論九版(志賀重昂)	八百円		
				岩登(舟田三郎)	五百円		

山空港は浸水のため欠航とのこと、台北市へ電話して蔡礼棠氏と連絡したが兎も角飛行機の出発次第に渡台せよとのことで、六日に渡台した。総会は一応進行の中ではあったが予定通り四日に開催されたが、神戸の藤田博君と偶々取材旅行中であつた山溪社川崎吉蔵社長が出席して祝辞を述べたと聞いていささか面目もたつた次第である。

台北市に到着後は、関係者との懇談や見学旅行に温い歓迎を受けた。双十節の後でもあり、多忙中にもかかわらず、十一日にはわれわれのために改めて中国大飯店にて歓迎会が開催されたので席上、日本山岳会からの祝の楯を贈呈し、祝辞を述べる機会が得られて幸であつたが、周会長からはまたわざわざ日本から祝賀に向ういたことについて感謝の辞をいただいた。出席者は訪日登山隊一次から三次、それに今年正月玉山登山でお世話になった顔なじみの方々等五十名余であつた。今までは外国登山隊の許可について受理窓口は「台湾省体育会山岳協会」で担当していたが今般の「中華全国山岳委員会」の成立により同委員会が窓口となり処理することになった。

名称 中華全国山岳委員会
(Republic of China National Alpine Association)

目的 全国山岳体育及び登山運動の推進。中華民族精神の発展並びに国際間の山岳運動の連繫増進。

組織委員 周百鍊 (台湾省政府委員)

主任委員 蔡礼棠 (同協会総幹事)

副総幹事 蔡景璋 (同協会常務委員)

秘書 王雲卿 (同副総幹事)

洪金寿 (同 同)

沈送來 (台北市建城区体育會理事長)

他に委員四十五名
加盟団体 台湾省体育会山岳協会・台北市体育会山岳委員会・新竹県登山協会・嘉義館山岳協会・国立台湾大学登山社・台湾銀行登山隊・台北市政府鐵路登山隊・台北市政府登山隊・外各県、市、学校、職場の二十九団体。

参考までに日本からの登山隊は昭和三十三年(民国四十七年)以降本年八月までに百十三隊、七百二十名に達し季節的に見れば一月二十六隊、三月が二十六隊で半数を占めている。特に昭和四十三年(三十一隊、本年は八月までに既に二十二隊が入山、昨年から登山隊が急激に増加しており、現在申込もさばき切れず本年冬の登山隊の受入れは困難とのことであつた。受入れについては大変な苦勞をしているので、何等かの制限処置を考慮せざるを得ない状況である。(折井健一)

会員通信

西表・カンピラの滝

古沢肇

たかだか標高四百m余りの山々がわだかまっている西表島の山中だから、滝があつてもさほど大きなものはないにまわっている。しかしこの島のカンピラの滝は琉球第一の名瀑と言われ、観光絵ハガキにも出ていくくらいだから言うのでこれを見に行つた。時に八月六日、渡島二日目だったが、このあとで島は台風八号に見舞われて大荒れに荒れたので、在島中た一回の遠出となつてしまつた。以下、そのときの記事――

西海岸の祖納(そなえ)部落から歩いて二キロほどで島で一番大きく長い

浦内川のほとりに出る。川はマンガロープになつて悠々と流れている。滝はこの川の主流にある。稲葉という小部落があり、すこしばかり水田がある。後からモーターバイクの音がして、すこしかれた姿の若い一組が現われた。滝の見物にきた土地のものらしく、一軒の家でクリ舟の交渉をしている。少年が出てきてモーター付きの舟を動かすようだ。渡りに舟とばかり早速わり込ませてもらい、とうとう帰る道までこのアベックにつきまといまいい不祥な小父さんで終始した。

川は上流二キロほどで狭まり、土地の呼称、軍かん岩で舟を下りる。そこから山道を登ること二キロくらい、茂みの中を少し下つて滝に出た。滝は二段に落ちていて。上が三十mくらいで細く、下も三十mくらいあつて幅広く壯観である。

滝の上流は二、三百mにわたつて岩盤が露出し、清流がさらさらと流れている。おう穴が沢山開いていて。ここを川平というので、カンピラ滝の地名はこの川平(カンピラ)からはじまつたらしい。ここでアベックも私もゆっくりと休んだ。

キャンプをしている数人の学生がいて、これから東海岸の古見へ山越しするといふ。古見も大原へも出られるが古見の方が道がわかりやすい。そうだが、西表の山道には營林署(八重山營林署)の標識は見られるが道標は少ない。それに谷を歩いて気のつくことは積石(ケルン)のまつた見られないことだ。沖繩には積石の習慣がないのかもしれない。西表島には毒蛇は姿を見えなかった。西表島にはいまだ島、周の道路が出来かけていて、どんどん開発が進んでいる。うっそうと茂る西表の自然は貴重である。早く保護の手を加えないと屋久島の二の舞になってしまうのではな

梓会だより

茶谷東海

あと四年で会の還暦と田部重治名誉会長の米寿を迎える梓会は固有会員四百名、復活後の新会員百五十名という盛況で今年はこの通り活躍した。

一、陣馬山ハイキング(第七回)

四月十三日(日)一〇・三〇上案下り和田峠峠と明王峠に分れて陣馬頂上を目指す。快晴。参加者は日高信太郎、紺野逸夫、海軍理学校長、浜田一馬、茶谷夫妻、二十九氏。日高さんは陣馬は初めてのこと、中々お元気が。午後一時上で合流し午餐。付近の桜はあと一週間程度で咲くところだが、栃谷尾根へ下ると二、三十本が満開で迎えてくれる。陣谷鉾泉で一風呂浴びて乾釜し筆者が一昨年の松本深志高校の西穂独標の落雷遭難について所見を述べると日高さんはあの前日元気に小梨平を出発する彼等を見たと言

二、三ツ峠ハイキング(第八回) 七月二十七日(日)一〇・三〇河口湖駅集合。参加者は安彦六郎、紺野逸夫、長谷川太郎、防大ワンダフルフォーゲル部長夫妻、茶谷夫妻、二男夫妻と二歳の孫ら三十一氏。裏登山口までバス。山道を聞きながら緩々道を一時登ると毛無山に出る。思いがけず雷雨にあい茶店に逃げ込む。霧が深くて頂上の展望はなかつたが三三〇下山の白滝コースは全くはれる。健脚組は母の白滝コースを二時間、一般組は天上山コースを三時間下つて河口湖駅で合流解散した。

三、年次懇親会(第八回)

菊薫る十月二十六日(日)正午小石川後樂園涵徳亭に集合。園内散歩の後記念撮影。出席者は第一号のバッジをつけた八十四歳の田部重治名誉会長、七十九歳の神谷恭来賓、朝井一男防大山

岳部長、進藤波男、浜田一馬夫妻、紺野逸夫、長谷川太郎夫妻、茶谷夫妻ら三十七氏。まず筆者が「忘れえぬ山旅」の中の田部先生の名を思い出して後、先生が秩父の山々について思い出を語られ、ついで神谷先生を紹介される。神谷さんは最近スイスの山を歩かれた話の中で特にスイスは山を大切にしている、山の中に電車以外の車を入れない、山小屋は清潔快適であるといふのが国の自然保護の在り方について一ツの教訓を示される。続いて山の花のスライドや防大山岳部アングレス登山の八ミリを鑑賞し、全員の自己紹介に二時間を要しむ。最後に筆者より水交会(海軍士官の親睦団体)内にハイキング部が設置されるので梓会が中心となって協力したいと提案、全会一致の賛同を得て一六・三〇開会した。

ゲルジャ峰登頂に成功

富士ヒマラヤ登山隊(葉師義義隊長)は十一月一日午後、中部ヒマラヤの末踏峰グルジャ・ヒマール(七一九三m)の登頂に成功した。登頂者は佐伯友邦隊長とシエルバのラクバ・テンジンであつた。

P29登頂を断念

ネパール・ヒマラヤのP29(七八三五m)をアタックしていた大阪登山隊(住吉仙也隊長)は七四〇〇mの地点まで迫つたが登頂ルートが発見出来ず十一月一日登頂を断念した。一行は十一月一日まで十日間七回登頂を試みたが、巨大な氷壁に登頂をさまたげられ、あと四百mのところまで天候悪化のため引き返した。巨大な氷の山頂は、いまにもくずれ落ちそう、夜間の気温は氷点下三十四度まで下つた。

シエラ・クラブ
のアウトディング

関口 周也

本年七月から十月にかけて、五班にわかれて、総勢百八十二名のシエラ・クラブのメンバーが来日し、北海道の知床半島から、九州の長崎まで、日本国中を回り、特に国立公園地内では余裕をもつて滞在し、機会あるごとに登山活動を行なった。

この旅程は、昨年、同クラブのアウトディング・コミッティの委員長であり、今度の旅行の立案者でもあるキンボール博士が来日した際に、多数のメンバーの意見に基づいて作成され、日本交通公社により、交通、宿泊その他いろいろが手配されて実行に移されたものである。特に行程のうち、山岳地帯は、通常のツーリスト・ルートでないため、富士山登山、穂高岳、槍ヶ岳登山と立山、剣岳登山について、本会よりガイドを派遣し全面的にお世話することにした。また、北海道の大雪山縦走登山は、本会々員佐々保雄氏により全て手配され、北大生多数がサポートに協力した。立山、剣岳登山に際しては、富山駅到着から、本会富山支部がいろいろのお世話をした。宿泊の手配、登山コースの決定、案内、折りからの水害のための交通手段の変更等、すべてにわたった。富士山はどうしても登りたいというメンバーのために分派が設けられ、富士山登山は、本会山梨支部が、また、このグループの穂高登山には、信濃支部より、グループごとにガイド一名が派遣された。

第一班は、ベティ・オズボーンとマリー・フリッドマン両氏に率いられた三十二名で、七月十三日から八月二十三日まで、第二班は、トム・ビルスパリーおよびハーマン・ホーン両氏に率

いられた三十七名で、七月二十七日から、八月二十三日離日。第三班は、リーダー、ドクター・スチュワート・キンボールとピーター・オーバーマイヤ両氏ほか三十八名で、八月二十四日から、十月十四日離日。第四班はリーダー、クラウド・ルック、ゴードン・ウォーレス両氏が率いる三十二名で、八月二十四日から十月四日まで滞在。第五班は、アラン・バンノーマン、トム・アウイン両氏をリーダーとする三十三名で九月七日来日、十月四日離日した。

本会からは、穂高、槍、立山、剣岳山のため、次の諸氏が派遣された。第一班、森田明夫。第二班田中二郎。第三班、関口周也、堀川英司郎、芳野越夫。第四班、小島甫。第五班、喜多啓允。これら本会からのガイドは、シエラ・クラブのリーダーに対するアドバイザー的の役割を果たした。

各班は、定められた日程に従って旅行をしたわけであるが、各リーダーは相当の権限を与えられており、各リーダーの考え(個性といってもよい)が、それぞれ異なっていた。アウティングのリーダーとして常に訓練を受けているようで、パーティに対しては、いさゝの責任を負わされておられ、メンバー各人に対する配慮と共にパーティの扱い方を見事なもので、登山技術も卓越したものであった。

シエラ・クラブは、自然保護を推進する団体であって、山岳会ではない、とよく彼らは言っていたが、ヒメヤやアンデスにまで出掛けている人達もあれば、ただ野山でハイキングやキャンピングを楽しむだけというメンバーもかなりいて、参加者は多種多様であった。

悪天にはばまれて予定の登山が出来なかつたグループもあったけれども、ほとんどの人達は、日本の山を十分に

楽しんだと思う。そして、だれもが日本の山の美しさを称え、同時に、いつまでもそれが保護されることを望んでいた。山岳地域以外でも、彼等は都会の生活よりも地方の方を好んでいるようであった。例えば、東京の五日間滞在は長すぎる、早く地方へ行きたいという人達が多かった。北海道旅行の途中では、わざわざ高等学校へ見学に出かけたグループもあった。英語の授業の教室では、望まれて、テキストを読んでも、英語の発音の授業を手伝った人達も何人かいた。彼らは、普通の外人観光客とは全く異質の人達であったといえる。自然にじかに触れ、日本人の生活にじかに触れてより多くのものを経験することを望んだ。

こんな彼らに、山中だけではあつたけれども、接することが出来た私達は幸せであつたと思う。言語の違いや、生活上の違いは、山へ登り、自然を愛する人達の間では、さほど障害にならなかつた。

彼らは自然保護の重要性を時として説いたが、この点についてはわれわれの考えと全く同じである。だが、保護の仕方ということになると全く異なるのである。だいたい、アメリカの国立公園と日本のそれは根本的に異なる要素をもっているといふことがいえるのである。

ける。文明のためには、道路やダム、建設が必要であることを承知しているが、彼らはそれに対して反対運動を展開する。シエラ・クラブの歴史は常に「フアイティング」だといっている人さえいた。

シエラ・クラブが、John Muirにより創立されて以来、ダイヤモンド・ジュビリーを祝い終えた今日に至るまで、常にこの「フアイティング」は、後継者達によって、続けられている。おおかたの「フアイティング」は、文明、文化の発展という大義名分によって敗北に帰するという。だが、「フアイティング」は続けなければいけないのだという。近年、「レッドウッド国立公園制度」という大勝利をもたらしたのも、この結果であらう。

観光客の増加に伴い新たに道路を作り、トンネルを掘り、木を切り倒すという問題は、向こうでも起っている。便利になる一方では、人間本来の姿が失なわれていく。

このような状況の下で、彼らは、メンバー一人一人が、自然破壊に対して、嘆くことにとどまらず、「フアイティング・スピリット」ともいふべき自然を守ろうとする情熱を燃やし続けているように感じた。

立山地区のアウトディング

若林啓之助

シエラ・クラブ・アウトディングの立山登山の部分については、富山支部が責任をもつてお世話することに決めた。細部については昨秋、ドクター・キンボールが来富しで打合せがあったが、何しろ二百名近いメンバーが団体で立山に登ることは初めての試みでもあり、特別の配慮を要する問題もあつて、今春ごろからその準備に着手した。

登山中の不要荷物を預ける件は、立山開発鉄道にお願いして、電鉄富山駅二階の部長室を一つ空けてもらうことにした。到着日の富山市での中食はJTBと話し合つて、地鉄ビルまたは県職員会館を使用することにした。なお、この機会を利用して中田支部長が英語で歓迎のスピーチをすることにした。これが後で大変好評を受けることになった。

富山へ最初に来たのは第二グループからである。

第二グループ(四十名)八月五日―七日
ガイド田中二郎(本部) 若林啓之助(支部) 石坂久忠(支部) 若林啓介(支部) 後藤有弘(JTB) 富大生二名 計七名

第一グループ(三十三名) 八月七日―十日
ガイド森田明夫(本部) 河内清(支部) 平野肇三(支部) 若林啓介(支部) 大井文子(支部) 富大生二名

第三グループ(四十名)九月三日―六日
ガイド芳野越夫(本部) 野島福三郎(支部) 浜田文二(支部) 富大生二名

第四グループ(三十四名) 九月十八日―二十一日
ガイド小島甫(本部) 笹倉慶造(支部) 山崎秀直(支部) 若林啓介(支部) 村山汀子(支部) 大井文子(支部) 富大生二名

第五グループ(三十五名) 九月二十四日―二十六日
ガイド喜多啓允(本部) 石坂久忠(支部) 河内清(支部) 富大生二名

山での行動はグループによって一日と二日のグループがあったが、A班剣往復、B班立山三山縦走、C班奥大往復とし、連峰ホテルをベースに分散登山の形をとった。八月のグループは天候に恵まれず、特に第一グループは八月豪雨のため山行をしないで下山したが、九月のグループは総て予定通り

行動し、秋の立山を満喫した。立山の美化がうまく行っていることは好感をもたれたが、立山トンネル工事については批判があったようである。

北アルプスに同行して

小島 甫

シエラ・クラブ第四班の穂高岳、槍カ岳、剣岳、立山登山のガイドとして同行した十日間の印象を次に記してみよう。

自然を積極的に保護すること、または山を大いに楽しむということはそれら自身、真意にかなったことだが、こと日本では落ちつくところ甚だ聞えのよいお話しに過ぎない。それぞれの国の事情の違いがあつて、もともとの話もすぐに出て来るものと出来ないものがあるにしても、こと北アルプスに関しては、自然保護の観念をさまざまに形、彼らなりに感じていたようである。どだい自然保護に関する基準なるものも定説があるわけがなく、それぞれの社会的環境のなかで、おのずと定められるものに違いないが、社会の進歩が自然の破壊を促すという観点からすれば、それにブレーキをかけるのは人間以外にない。そこで、両者のバランスが成立するときこそ、自然に対する価値感を見出すことが出来るのだらう。

単純に考えて、自然に接することによって本来の自分をとり戻せばよい。これは理屈で考えることではなく、リフレッシュを自分に与えれば、それでよいことなのだ。——そう彼らは考える。

弥陀が原では、バランスのとれた景色に驚嘆する一方、足元には大きなトンネルが掘られつつあるのを見て、これは何事だと思ふやう。穂高の沢尻の途中でも、流れる水を飲むとして

これは飲めない水と説明する。Beet use there is a BENJO などと冗談にもならない。濁沢では、おびたらしいゴミの山を見て矢のような質問を浴びせてきた。「ゴミの処理は?」「この管理は?」「飲料水は?」。あたりにいるキャンパー達にインタービュすることも躊躇しない。彼らの関心が頂点に達したのは、穂高山荘のことだった。おりから、今田重太郎氏が山と積まれた空カンの運搬をやっていたか、お年寄りを見て気の毒に思つたのか、話したから掛け合つて呉れという。時折り、風で紙カズが舞うと異様な臭気が鼻をつく。空カンやビンが焼却することが出来ないから、穴を掘つて埋めていたといえ、一時はいいが、本当の解決にはならないという。なぜ荷上げにきたヘリコプターで下におろさないのかと当然のように訊く。もともた話だが出来ない事情があると知つても納得されない。雪が降つて、流されてしまえば一応はケリがつくという。濁沢には、また一つのゴミの山が出来来るけれど、どこにも解決の糸口は見出せない。これは全く登山者一人一人の公徳心の問題だと考える一方、この背景にある大変な数の登山人口と商業主義の観光事業に目をみはらざるを得ない。

そして、最後の質問は「このような状況の下にJACはどのように考えどのような運動をしているのか」ということであつた。

それにしても、彼らは異口同音にいう。日本は美しい国だ。小雨の中を槍から槍平へ、霧につつまれた滝谷、緑にぬれつつぶされた溪谷を、ムンムンとたどる木々の香をついて白濁出合いに下るとき、彼等の口から *scenic* という言葉が、いく度か聞こえた。

自然の美しさだけでなく、行く先々

で触れた人の心、特に富山では、富山支部あげての歓迎に日本の記憶と共に深い感銘を与えたことと思う。それだけに、わが国の自然保護の現状が惜しまれてならないのであらう。

シエラ・クとの

日光懇親山行

シエラ・クラブ一行の歓迎会をどういう形で行なつたらよいかという問題は、昨年来、集案委員会ならびに海外連絡委員会、常に話題になつてきた。そして何分にも先方の人数が多いので、考えついたのが、日光の懇親山行であつた。かくして五グループのうち、日光での滞在が土、日曜にぶつかる四Aグループと懇親山行を行なうことに決まつた。

そこで、今回は学習院山岳部(GAC)の協力を得て、学習院光徳小屋を借用して、土曜日の夕刻、キャンプファイヤー、日曜日、各パーティに分れての懇親山行という計画をたてた。九月十三日(土)夕刻、光徳へ集合。ところが、連日の前の土曜の午後という事で日光への交通事情が予想以上に悪く、東京から車で六・七時間かかってしまったため当夜は光徳ロッジのラウンジで懇親会を行なうことになつた。

パーティは堀川英司郎氏の司会により、各自の自己紹介にはじまり、八時から十時の二時間にわたり、まことに楽しいひとときをすごした。

明るく九月十四日(日)三パーティに分れて懇親山行を行なつた。

(松田)

・Aパーティ、男体山登頂
リーダー 松垣陽三以下十一名(日本側八名、シエラ側三名)
・Bパーティ、奥白根山登頂
リーダー 設楽美徳以下十名(日本側

七名、シエラ側八名)
・Cパーティ、切込・刈込湖ハイキング
リーダー 吉田広明以下二十二名(日本側八名、シエラ側十四名)
男体山パーティ

シエラ・クラブのロバーツ、ロイ、ヘルバートの三人とマナチャン(七歳)タケチャン(五歳)を含めてわれわれ十一人(前記五名の他松垣、諸岡、山田、倭島進、淳子、河上)では、光徳ロッジのトラックで志津岬まで上り、登りはじめた。時々妙な英語を交えながら樹林をぬつて進む、タケチャンも *Fun, Climb!* だけあって元気に登る。頂上で記念撮影、少々オーバーな握手の後中禅寺の二荒山神社へ下る。ロイが昼食のカスを中禅寺まで下つてゴミ箱へ捨てているのを見て、なるほどと感心させられた。学習院の光徳小舎に招待して、冷いビールで乾杯し、シエラの三人は再度の来日を約し、またわれわれはマウント・ホイットニーをいつの日か共に登ることを約して別れた。

奥白根山パーティ (松垣)
金精峠から白根山に登り、前白根を往復、金精峠に戻つた。
切込・刈込湖ハイキング
シエラ・クラブの中で張り切っているグループは男体、白根へでかけたのでこのグループは女性を主体としたハイキング・パーティになつた。一行はウォーレス・リーダーに率いられたシエラ・クラブ十四名、日本側は、吉田リーダー以下、学習院の女性グループ大滝、中野、宇田川の三名、中河与一氏、それに松田夫妻と二女の尚君の八名。

山王峠より、切込湖に至り湖畔で昼食、シエラの一行は、いあわせた先着のパーティとフォークソングの応酬。美しい日光の森林を賞でつ湯元に至る。途中、多くの若いハイカーに会つてはげまされたが、年配のハイカーにはついで会わずじまい。どうして日本には老人のハイカーが少ないのかとつつ込んだ質問もでた。

湯元で隊を二分し、元気のあるグループは湯湖を廻り、他はバスで光徳入口まで至り、逆川右岸の林道づたいに光徳ロッジへ帰着。

参加者 シエラ・クラブ関係一四A班リーダー、ウォーレス氏以下二十二名(五夫妻、婦人七名、男子五名)
△JAC関係 諸岡一、中河与一夫妻、堀川英司郎、隈部恵子、土肥正毅、田村宏明、伊東頌二、神崎忠男夫妻、古旗、松田雄一、松田柳子、松田尚
△GAC関係 設楽美徳、倭島進、同淳子、真名子、岳彦、河上敏子、山田忠、里見芳郎、吉田広明、大滝英子、中野文子、城水泰子、宇田川智子、松垣陽三 以上 五十三名

キンボール夫妻歓迎会

八月二十七日キンボール博士夫妻を目白の椿山荘に招き歓迎晩餐会を催した。

出席者

石神甲子郎(自然保護協会)、三田幸夫、日高信六郎、吉沢一郎、今井嘉道、丹部節雄、辰沼広吉、松田雄一

帰国あいさつ

広島大中部アガニスタン・西部カラコルム学術調査隊一行九名は三カ月にわたる踏査の旅を終え、去る九月上旬無事帰国いたしました。アフガンでは外国隊として始めて中部高原地帯を横断、南部の幹線道路をへて約二六〇キロをジープで走破。北部支隊は小バミール高原ワハン地区の六三九三m峰登頂に成功しました。(伊藤隆夫)

図書紹介

すこし昔の話

初見 一雄著

「初めんの本が出た」と喜ぶのはかつて彼と下宿生活を共にし、今は東北の片隅に蟄居している私だけでは決してないことが、本書に添えられた葉書に、大飼哲夫、加藤泰安、島田巽、中野征紀、中屋健一、村山雅美の諸氏が書いてある文章を見てもわかる。初めんの外見に相違して、なかなか筆の立つ人であることは、本誌に寄稿した諸文、「追員の銀光」(二五六―二五七号)「磯野君の泪」(二六二号)「常さん小伝」(二七〇―二八二号)などで、注目しておられた本会々員も少なくないであろう。

私は著者からこの本が刊行の運びになったという便りをもった時、その中に書いてあった本書の標題、一、北千島物語、二、樺太狼入日記、三、北の街―札幌、四、すこし昔の話を一瞥して、北千島物語は北大山岳部報第五号に載った紀行、北の街―札幌は本誌第四五号と第五〇号に載った「札幌の冬と春」「札幌の夏と秋」、すこし昔の話は前記「追員の銀光」や「常さん小伝」などを再録したものだろうと想像したので、まだお目にかかっていない樺太狼入日記というのを一番読んで見たいと思った。ところが、本を手にして読んで見て驚いたことは「北千島」も「札幌」も「常さん」も全く稿を新たにしたり書き下ろされたものであり、しかも相当な労作であるということであった。著者が学生時代に試みた北千島や樺太の漂泊の旅で体験し、見聞したことをそれなりにせず、それから三十余年の間これを温め

ながら、その間に調べ出し、拾い集めた沢山の考証や挿話を紀行の間にちりばめていることがこの本の価値を高め面白さを深くしているのである。これは同年代の大学山岳部出身者の間に非常に広く顔の売れている割には案外知られていない、著者の極めてマジメな一面を遺憾なく発揮しているものである。それは前記葉書に加藤泰安氏が「だいたい考証というものは、よほどまじめな勤勉家のするもの、である。われわれの知る初めんとはイメージが全くつながらない。いつの間にか彼が勉強し、丹念に足を運び、これだけの考証をしたかというところは驚異である。まさに彼は怪人である」と書いておられることでもわかる。しかし初めんは怪人でも何でもないのである。泰安氏は彼の考証癖を意外と受取られたようであるが、初めんの博識と、物事をいい加減にしない性向は、たとえ、液体燃料が入ったの怪気筒の中に、必ずその片鱗をのぞかせるのを、氏はお気付きではなかったと見える。同じ葉書の中で島田巽氏が述べておられる、南極西堀隊のために心をこめて自家調製した塩昆布の製法を披露した時、その段取りのこみ入ったことと並居る夫人連の舌をまかせたという話も、初めんのそういう性向のあらわれであり、私は目にみるような気がするのである。因みに、この初めんの塩昆布は第三次マナスル隊の樺太隊長が高度の影響で食欲不振に陥った時のために、更に更に心をこめて作られたはずである。

さて、その考証であるが、これはこの本の随所に見られる。しかしその中でも圧巻は、「北千島物語」に収められた報効義会の盛衰の経緯であろう。これは著者が昭和十年に訪れた占守島で、義会唯一の生存者、別所佐吉翁とめぐり合ったことが奇縁となって、翁とその子息から手繰り続けて物にした考証であり、あるいは埋もれてしまったかも知れない貴重な実感を、よく書き残してくれたと感謝したくなるようなフロンティアの記録である。これを含めて、この「北千島物語」は、その辺の作家と称される連中の作品などより数等読みごたえのある力作であり、これ一つ取り出しても立派な作品である。

「樺太狼入日記」では、日本領土であった頃の樺太が持っていた秘話(?)が、昭和十一年この地を八ヶ月にわたってくまなく歩き廻った著者の体験や見聞に織りまじえて、面白く語られている。ツンドラあり、オタスの杜のオロコ、ギリヤークあり、馴鹿王ヴィノクロフ一族あり、造材飯場、マタギ、ジャコウ、タコ部屋、ケシの密栽培もある。更には岡田嘉子越境事件(この事件は著者が数香を訪れた数年後と書かれていて、数年前の誤りであろう)や、流適のボーランド志士、ビルスドスキー博士の妻であったアイヌの老婦とその娘のこと(金田一京助氏の「北の人」(昭和十年、梓書房)の中の「樺太だより」に書かれていることと若干の食い違い―例えばボーランド独立の元勳ビルスドスキー大統領と博士との兄弟関係や、博士の死去事情など―があるが、いずれが本当かはわからない)に至るまで書かれていて、樺太の秘話というほどのものは殆んど網羅されている。ただ私個人として惜しいと思うのは、南極の白瀬隊に機大係として参加したアイヌ、山辺安之助のことが欠けていることである。著者はその近くまで行っているが、彼にめぐり合えなかったのだから、勿論止むを得ないことである。山辺安之助のことは前記「北の人」や、同氏の「あいぬ物語」(大正二年、博文館)に詳しく、近年では新田次郎氏の小説

もあるが、いずれも壮年期以前のものである。私事にわたって恐縮であるが、私は著者と同じ年に、当時の北大解剖学教室の山崎雄雄教授(本会々員、故人)岡田正夫助教授(本書に出て来る日本「三頭」の一人)塩田勲講師、中野征紀助手(南極西堀隊医師、チャムラン登山隊長)の驛尾に付して、樺太アイヌの人類学的調査行をしたことがあり、その時山辺安之助翁に会う機会に恵まれた。その頃樺太のどこかを歩いていた著者も一緒に居たならば、富内湖畔の明媚な風光を背景とした、老いたる探検家、山辺安之助の風貌が著者の情熱深い文章となつて、本書に収められていたに違いないと空想して残念に思うのである。

ここまで書いて来て、私はこの本の書評を書くのに適任ではないことに気付く。懐旧の思いが次から次と湧いて来てとどろがなくなるからである。そこで残る「北の街―札幌」と「すこし昔の話」については贅言を省き、この本の評として最も簡潔に射的しているものとして、前記葉書に載った大飼先生の文を引用させていただこう。

日本登山史

山崎安 治著

日本の山岳愛好家は西洋の登山史には詳しい。アルプスにしてもヒマラヤにしてもそれぞれ立派な登山史の文献が戦前から手に入りやすかつたからだろう。クエリッジ、グリブル、ランなど登山史家といわれる人の書いた本だけでも相当ある。ヒマラヤの探検史についてもヤングハズバンドの著書の他、戦後出版されたティルマンその他登山家の著した登攀記でもヒマラヤの探検登山史については可成り詳しく知ることが出来た。

ところが、日本の登山史となると、自分たちの国のことなのに意外にわからない。この本の著者である山崎君の「剣の窓」(二玄社)「穂高星夜」(朋文堂)、熊原政男氏の「登山の夜明け」(登山の先駆者たち「校倉書房」)などが、本格的に日本の登山史に取り組んだものといえるくらいだが、それらにしても剣岳とか白山とか、富士といった一つ一つの山の登山史を対象としたものである。そのほか井野辺茂雄氏の「富士の歴史」とか、穂高三彦雄氏の「槍ヶ岳開祖播磨」など立派な文献も少なくないが、日本人の山登りの歴史というものを一つの流れとして把握するには、このような地域別、山岳別の登山史を並べるだけでは不十分であろう。

この異色の本も、もしかしたら、余り

図書室便り

も、アルプスやヒマラヤよりはるかに古い歴史と複雑な要素をもった日本の山々の登山史を調べるのは容易でない。海外の登山史にツヨイわれわれ日本の登山者たちが自分の山の歴史に暗い原因も実はそれなのだ。

著者が登山史と取組んでから十数年以上になるだろうが、地域別、山岳別という縦の流れだけでなく、横の流れもあわせて探求するという研究態度は日本登山史への一つの挑戦といっているだろう。それも遠く石器時代から現代にいたるまでの日本人の登山の変遷をまとめたのだから苦しい山登りにも似た作業であったに違いない。

著者は現存する山に関するぼう大な文献、資料をしょうりょうして一応日本人と山登りとの長い、そして複雑多岐な関係を明らかにした。著者もいつているように、これが完璧なものだとはもちろんいえない。とくに伝説と歴史の区別のはっきりしない部分の少ない中世の登山(第二章)や十分な資料のない「山の発見」(第一章)については著者今後の研さんに期待せねばならぬものが少なくない。

しかし第三章「近世の登山」第四章「近代登山のはじまり」では近代登山以前における日本人の登山というものが、単に信仰的、宗教的なものだけでなく、現代の純粋な登山に通じるものがきわめて多かったことや、山気狂いともいえるような山好きの人間の少なくなかったことを明らかにして読者に新しい興味を抱かせるものがある。

ともあれ数多い日本の山の本の中で、この本は異色ある労作といえる。(渡辺公平)

昭和四十四年六月白水社発行、A5版三四ページ、写真十二ページ、総布装、定価千三百円。

新刊図書受入報告(昭44・10)
昭文社寄贈
(1) 田井裕彦著『中央アルプス・駒ヶ岳・空木岳』(山と高原地図シリーズ6) 昭44・7

(2) 中村謙著『ふさふさの山—上信越国境を歩む—』昭44・9 富士波出版社刊

(3) 田部井淳子氏寄贈
(1) 佐奈ルミエ著『ふみあと—佐奈ルミエ遺稿集—』昭44・9
定期刊行物受入報告(昭44・10)
(部数・会報類)

(1) 『あしな』 No. 117 (44-8)
(2) 『兵庫山岳』 No. 29 (44-10)
(3) 『国立公園』 No. 237/238, 239 (44-9,10)

(4) 『こまごま』 No. 3/4 (44-8)
(5) 『京都山岳』 No. 533, 534 (44-10,11)
(6) 『山嶺』 No. 474 (44-10)
(7) 『自然保護』 No. 88 (44-9)

(8) 『山』 No. 448 (44-10)
(9) 『山と雪』 No. 138 (44-10)
(雑誌)

(1) 『アルプ』 No. 140 (44-10)
(2) 『岳人』別冊(70年のスキー) No. 269 (44-11)
(3) 『HIKER』 No. 169 (44-11)

(4) 『山と溪谷』 No. 374 (44-11)
Journals Arrived in
October 1969

1. "Die Alpen" Jahrgang 45, 9, September 1969.
2. "Die Alpen" Jahrgang 45, Quartal 3, 1969.
3. "Alpinismus" Jahrgang 7, 9, September 1969.
4. "Der Bergsteiger" Jahrgang

36. Heft 9, September 1969.
5. "Chicago Mountaineering Club the Newsletter" Vol. 23, No. 3, July/August/September 1969.
6. "The Geographical Journal" Vol. 35, Part 2, June 1969.
7. "Mountain" No. 5, September 1969.

8. "Österreichische Alpenzeitung" Jahrgang 87, Folge 1366, Juli/August 1969.
9. "Österreichischen Alpenvereins Mitteilungen" Jahrgang 24, Heft 7/8, Juli/August 1969.

10. "U.I.A.A. Bulletin" No. 36, October 1969.
11. "Union Excursionista de Catalunya. Senderos" No. 130, October 1969.

P. S. (Z's)
皆様お元気でしょうか。もう風邪をひかれた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

十月二十五日の図書交換販売は大雨にもかかわらず、また何組かの結婚式があったにもかかわらず、皆様の熱心なご支援で、六四七点もの出品物があり盛況に終えることができました。

この催しは、毎年一度、十月下旬に行ないますので、今から整理などを行って、来年度は今年度以上に、ぎやかな会にするためにご出品下さればありがたく存じます。(東)

△忘れもの 図書交換販売会にいらした方々、お忘れものがございましたら、図書室の東までご連絡下さい。

会務報告

十一月理事評議員会

(9日7時、本会ルーム)

△出席者 三田会長、吉沢副会長、山崎、野上、広谷、大塚、藤田、長尾、浜野、松田、川上、辰沼各理事、折井村山、藤井、金坂、沼倉、中田各評議員

△議事
① 会員に対するエベレスト登山募金推進の件
募金委員長を増田甲子七氏として積極的に募金をすすめる。(大塚)

② 山岳広告担当理事の件
藤田理事に担当してもらう。(大塚)

③ 万博におけるネパールのカラー・コルトン製作の件
大森弘一郎、依田孝喜、藤田孝の三氏に依頼し具体的に進める。(辰沼)

④ エベレスト登山隊本部設置の件
本部長加藤泰安氏とし会報二九三号に発表したとおり決定。秘書に事務局佐々木嬢を向らせ、会計として布施氏を採用した。記録担当について考慮する。(辰沼)

△報告
① 堀本徳次郎氏死亡の件 (大塚)
② 年次晩餐会の件 (大塚)
③ 指導委員会富士山技術講習会および「冬山を前に」シンポジウムの件 (広谷)

④ 海外連絡の件 (松田)
UIAAの年次総会にモスクワ在住の田村委員に出席してもらった。ヒラリー卿は来年七月二十二日から一週間本会で招待する。十一月下旬に日外人交歓会を開く。(折井)

⑤ 中華全国山岳委員会発会式の件 (折井)
小味、藤田(博)の二氏と出席、台風で飛行機が欠航のため六日台北に着いた。現地では非常によろこばれた。

⑥ 第二三五回箱根現地小集会の件 (川上)
⑦ 図書交換会、およびこの一展の件

(野上)
⑧ 岡部浩子さん葬儀の件 (山崎)
⑨ 佐藤隊イストル・オ・ナル登頂の件 (吉沢)
彼女らは最高峰七四〇三メートル峰を誤認し、七三〇〇メートル峰に登ったことが明らかとなった。米国隊などすべて誤認しており、ことし最高峰はスペイン隊が初めて登った。佐藤隊はただ誤認しただけで他意はない。

⑩ アジア大山岳部穂高岳遭難の件 (辰沼)

第二三五回小集會報告

現地小集會が十月二十五日夕方から神奈川県宮根湖尻キャンプ場で行なわれた。朝から降りしきった雨も止み、キャンプファイアーの囲りに作られたおにぎり屋(屋号手阿加亭)、おでん屋(金時)、バーベキュー、焼肉屋(シュルシュル)、それにバーを揃えて、真赤な火を囲みながら、川上集會理事の司会で会が始まった。

子供たちと汽車ポポ遊び、学生部のギター、コーラス、円陣をくんで踊ったりして閑談はつきなかった。

残念なことには雨が降り出したが傘をさして賑やかな宴を愉しんだ。

二十六日、鳥の啼き声に目が覚めた。快晴。学生部の仕度した朝食を共にし、自己紹介をして各自の車に分乗して金時登山口に向う。富士山は昨夜の雨が雪だつたらしく五合目からは真白になっていた。紅葉もちょうど見頃で気持ちいい天気だ。上は日高信太郎氏、下は松永康子さんの令息新平君(二歳十ヵ月)も一緒に金時山へ登る。

江の島が見え、裾を長く引いた富士山の下に位牌岳、越前岳が見える。下りに草原に寝そべって歌ったり、のどかな昼寝をしたりして遊んだ。

膨大な会員を抱えた本部でこのような集會をするのは初めてのもので、集

会委員一同どんな結果になるか心配していたが、学生部の方々の援助のお陰でスムーズに行事が運び誌上をかりてお礼を申し上げます。新入会員で会員になじみのない方々もこのような機会に参加されたら早く親睦が深められると思う。

家族ぐるみの参加も大部おられた。

(集委員会 斎藤桂)

関西支部小集会報告

シエラクラブ会長キンボール、オーパーマイヤー両氏夫妻が日本一周旅行で神戸に立ち寄られたのを機会に九月十三日午後五時から神戸市兵庫区橋通一丁目料亭がまで、歓迎夕食会を開いた。前関西支部長津田周二、兵庫岳連会長宮崎辰雄氏らをはじめ、関西支部委員十数名が参会、ヒマラヤをはじめ、日本の山々、アメリカの山々の話題に花が咲き一同で日米両国の踊り、民謡、遊戯などを披露し楽しい一夜を過ごした。(関西支部委員水野政博)

パキスタンにおける登山許可

この度外務省文化事業部長より、九月二十二日付情文二第二四九六号をもって、在パキスタン曾野大使からの書信が届きましたのでお知らせします。

昭和四十四年九月一日

在パキスタン曾野大使

殿

本年度日本隊のパキスタンにおける登山は終了したので、この際当館として気付いた点を取りまとめると左記の通りである。本件関係方面に伝達ありたい。

記

一、本年度パキスタンにおける登山を申請した日本隊は隊にのぼったがこのうち関西学院大学、東京岳人倶楽部、福岡県山岳連盟の三隊に対し、パキスタン政府の許可が与えられ

た。このうち福岡県山岳連盟は許可なしで来バシ、来バ後許可取得に奔走したもので、幸いにして許可が与えられたからよかったが、若し許可が与えられなかったならば、大部隊でもあり、非常に苦境に陥いるところであった。無許可のまま来バすることは、許可取得手続のため現地待機の日数が長期にわたり、従って無用の出費を強いられるのみならず、許可が与えられないという保証なきための心理的不安は少なからざるものがある。従って明年度よりは必ず許可を得た後に来バするようにして貰いたい。

二、パキスタン政府は許可を与えた登山隊に対しては Liaison Officer (陸軍将校) を付し、できる限りの便宜を供与するが、これに反して、無許可登山は、パキスタン政府が非友好的行為として甚だ嫌う行為であるので、日本隊としては、日バ友好関係維持の見地から、この無許可登山は行なうべきでない。なお、戒厳令施行後パキスタン政府は、無許可登山に対し取締りを厳にしている。

三、パキスタンにおいては、登山許可問題は国防上の問題と考えられ、極めて慎重に取扱われる。日本登山隊の許可申請に対してはパキスタン政府がなかなか許可を下付しないことについては、以上のような考え方が背景になっていることを注意する必要がある。

しかし、パキスタン政府は登山を許可する場合、Liaison Officer を配属することを条件とし、Liaison Officer 配属の余裕がないと、登山許可は下付しないが、目下戒厳令下であって、陸軍が将校を「登山など」に割愛できる余裕はないというのが先方の基本的考え方である。四、学術調査団等と称するも、事実上

登山するものについては、登山隊と手続上全く同じである。

また、Trekking については、本年度日本隊より数件の許可申請を行なったが、Trekking も管轄が国防省でなく、辺境省ないしカシミール省であること、将校の配属がないと言ふ二点以外、手続の煩瑣なことは登山許可と同じであって、本年度は一件も許可が下付されなかった。しかして、パキスタン政府は戒厳令下 Treading に対しても取締りを厳にしている。

解禁後ネ王国から登山許可を得た登山隊一覽表②

「山」二九一号五六五ページに二十七隊のリストを掲載したが、その後、外務省より、情文二第二四八六号および二四九五号をもってその後の許可情況の連絡があったのでお知らせする。

② Czechoslovak, Annapurna W, Mr. Vladimir Trochazka 隊長、9名、Post monsoon of 1969, 許可時 1969年8月。

(注) この隊は外電によれば、10月7日、登頂に成功した由。

③ Japan, Annapurna III 女子登山クラブ、(Climbing Club of Tokyo Women's Expedition) 宮崎英子以下13名、Premonsoon 1970, 許可時 1969年9月。

ルーム日誌 (44年10月)

2日(木)	定例理事評議員会
3日(金)	ネパール研究のつどい・日ネ協会
15日(水)	婦人懇談会
16日(木)	図書委員会
17日(金)	集委員会
22日(水)	稲門山岳会
23日(木)	集委員会
24日(金)	学生部臨時総会
	ネパール語講習会・日ネ協会
25日(土)	指導研究委員会
27日(月)	第二回図書交換即売会
30日(木)	常務理事会
31日(金)	集委員会
	ネパール語講習会・日ネ協会

雑学教室

一〇月中来室者 四三七名

毎週本会の談話室で催されている土曜会は、一種のクラブであることは、すでに御承知のところだが、最近はずが十数名位。たまには珍客も顔を見せて、常連を喜ばせてくれる。神谷バーのウイスキーが、安く飲めるばかりでなく、楽しい一夕を過そうと集る閑人閑話の場である。

而しここはまた、雑学教室とも云えるだろう。誰が講師というわけではないが、皆が語り合う話の中に、自ら学ぶべき何物かが数々見られる。岳人の集りだから、山に関係のある話は勿論多く、この夏常連の何人かが参加した、アルプス旅行の土産話に花が咲くと、それを補って、若き日にスイスの山小屋に滞在したA画伯の思い出話などが出て一段と興を添える。また時には古き時代の山小屋や、案内人の話から、温泉宿の風物など、民俗学に移ることもあり、山菜や高山植物の講師も一役買って出る。かと思ふと、話はいつかたわいもない世俗の漫談から、お色気までとび出すという次第。ともあれ間口の広い話題のうちに、何か知ら教えられることが多く、これが雑学教室のゆえんである。

よそのクラブのように、碁や将棋、麻雀等、長時間ねばることもなく、二三時間を楽しく雑学を学び、あっさり引揚げるのが、わが土曜会である。

山日記発売 一九七〇年度版山日記が発売されました。定価五百三十円ですが、会員には一割引きでおわけします。

事務局に郷原さん 佐々木さんがエベレスト本部に出身になったので当分郷原泰子さんが事務局に移ります。

「山岳」広告のお願い

「山岳」第六十四号は本年度刊行を目標に編集をすすめています。御高承の如く、巻末に広告を掲載しておりますが、この広告は「山岳」出版のための大きな財源でもあります。皆様により広告先の御紹介をいただきたくお願い申し上げます。お心あたりのございます方は事務局までお知らせ下さい。

▽広告料金(印刷黒一色)

普通1頁(25×50cm) 一五、〇〇〇
1/2頁(25×50cm) 八、〇〇〇
1/3頁(25×50cm) 六、〇〇〇
英文見返1頁 二五、〇〇〇
奥付見返1頁 二五、〇〇〇
裏表紙見返1頁 三〇、〇〇〇
(以上)

「山岳」編集委員会

あとがき 初見さんの「すこ昔の話」の出版を祝う会が十一月十一日国際文化会館で開かれた。今井田研二郎、沼野洋一、清田清、田口二郎、加藤泰安、折井健一の諸氏を始め北大、日大関係者が多数集まり、昭和初期における日本近代登山史の縮図のようなまことに楽しい集りであった。(山崎)

昭和四十四年十二月十日発行

東京都千代田区神田錦町
三三三 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金 600円也

送料 別受け 金 120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2-15、電話(943)0311(代表)

大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)

名古屋店・昭和区雪見町1-15、電話(731)7331(代表)

工場:大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)

東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内

電話(352)1556・1557